

東京大学 工学部 計数工学科 伊理研究室

伊理研究室は、東京大学工学部計数工学科、第2講座第5講座を指します。われわれの学科は、歴史的に、応用数学科、応用物理学科、計数工学科と名前が変わってきたためか、『伊理研究室というのは何学科ですか』という質問をよく受けるのですが、現在のところ、伊理教授が講座をもっている（第2講座は兼任）計数工学科の2つの講座を伊理研究室といっています。

昭和60年度の伊理研究室は、伊理教授、伏見助教授を含めて総勢19名です。うちわけは、第2講座10（教授（兼任）、助教授、助手2、博士課程在学者1、修士課程在学者4、研究員1）、第5講座9（教授、秘書、助手、博士課程1、修士課程4、研究員1）です。これらのメンバーが、教授、助教授を中心としたいくつかのグループとなって研究活動を行なっています。昭和60年の東京大学工学部紀要に掲載した研究テーマは次の9つです。

- 地理的最適化問題の効率的解法に関する研究（伊理正夫、鈴木敦夫）
- 大規模電子回路解析の諸方法の研究（伊理正夫、久保田光一）
- 偏導関数の高速自動計算と丸め誤差の自動推定法（伊理正夫、土谷 隆）
- 擬似乱数および準乱数に関する研究（伏見正則）
- 統計的順位づけおよび選択の問題（伏見正則）
- 自然言語理解システムの研究（伊理正夫、富岡 豊）
- 計算機利用日本語教育システムの研究（舟久保熙康、伊理正夫、荒木卓也）

- 線形計画法の新解法の研究（伊理正夫、今井 浩）
- 計算幾何学の研究（伊理正夫、今井 浩、田中克彦）

各人は研究成果を積極的に内外の研究発表会、論文誌に発表することを心がけています。そのための準備や、授業（大学院の授業は輪読形式が主）の準備や、研究室内部の輪講の準備やらで、伊理研究室は、早朝から深夜まで、あかりの消える時がないくらいです。また各人が他の人の研究になるべく関心を持ち、コメントをするという伝統があるので、研究室の黒板の前では、よく議論がたたかわされます。

こうして、助手、院生は、伊理教授、伏見助教授の薫陶を受けて研究者としての基礎的な訓練を受けているわけですが、一方、現代の学生気質を反映して、研究室単位での旅行、コンバも頻繁に行なわれます。その中で、毎年恒例となっているのが、毎年1月15日、成人の日に本郷の、大学に近い伊理教授の自宅のオープンハウスです。この日は、伊理教授宅で立食形式のパーティーが開かれます。今年はOB、現役あわせて40名ほどが集まり、伊理教授の奥様の手料理を食べながら、飲み、語り、大騒ぎをしました。

伊理研究室の雰囲気をご私なりにまとめてみました。われわれの研究テーマに興味をもたれた方は、下記宛ご連絡ください。

〒113 文京区本郷7-3-1 東京大学 工学部 計数工学科 第2講座 鈴木敦夫

●ミニミニ●OR●

棒 倒 し

「運動会」といえば、われわれが小学生だった頃には、秋の学校行事の1つであったと思うが、現在は、受験等の事情により、多くの学校では、春に行なうようである。また、生徒数が多いため、いかに「速く」プログラムを消化するか、時間との戦いのようなものである。

昨年観た小学校の運動会のなかで「棒倒し」があった。小生の体験した棒倒しでは、アタッカー、ディフェンス、キーパーの3役に編成され、強いチームほど守備に力を入れ、体格の大きい者が守備役にまわって

いた。

今回観た「棒倒し」では、用意ドン、開始10秒足らずで「ピー・ピー」。ほぼ同時に両側から、棒の倒れた合図があった。なんの事はない、勝負が早くつくよう、先生の指示で、体格の大きい者、半数が、アタッカーになり、残りの小柄な生徒たちが、守備役を務めていたのである。したがって、棒付近の戦いは、両方とも「あっという間」に棒が、倒れてしまったのでした。これも、時間との戦いから生まれた1つのORであらうか。

(I)